

平成21年 6月 1日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19520158  
 研究課題名（和文） ハワイ「琉歌」の基礎的研究

研究課題名（英文） Fundamental study on "Ryuka" in Hawaii

## 研究代表者

仲程 昌徳 (NAKAHODO MASANORI)  
 国立大学法人 琉球大学・法文学部・教授  
 研究者番号：50044863

研究成果の概要：ハワイへ移住した沖縄県人は数多くの琉歌を残している。また、那覇市、浦添市、恩納村等が主催する琉歌大会ではハワイの琉歌作者たちの詠歌が上位を占める。移民の表現を研究する上で、さらには現在の琉歌を研究する上で、ハワイ「琉歌」は見過ごすことの出来ないものである。ハワイで発行されている新聞『ハワイパシフィックプレス』（1977～2004年）、『ハワイ報知』（1980～2006年）に掲載されているハワイ「琉歌」の集成を行い、ハワイ琉歌の特質について明らかにした。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：沖縄文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：琉歌、ハワイ琉歌会、琉語川柳、移民、帰米二世

## 1. 研究開始当初の背景

(1) ハワイには「ハワイ琉歌会」「本流ハワイ琉歌会」の二つの琉歌会がある。ハワイ琉歌会はこれまでに『琉歌集—ハワイ琉歌会創立一周年記念』（1981年）、『ハワイ琉歌会同人集—創立満5周年記念誌』（1985年）、『微風—ハワイ琉歌会創立10周年記念誌』（1990年）、『アロハー—ハワイ琉歌会創立13周年記念誌』（1993年）、『貫花—ハワイ琉歌会創立20周年記念誌』（1999年）といった琉歌集を刊行している。ハワイへ

移住した沖縄県人が「琉歌」に何を託したのか、これまで刊行されてきた琉歌集を追うことで明らかにすることが可能であると言えない訳でもない。しかし、琉歌集が刊行される以前の琉歌や、琉歌集を発行しなかった本流ハワイ琉歌会の作品はこれまでまったく知られていなかった。ハワイでいつから琉歌が詠まれるようになったのか。またその琉歌の内容はどういうものであったのか。このことを明らかにするためには、ハワイで琉歌会に参加している

人々に聞き取り調査を行い、ハワイ琉歌会及び本流ハワイ琉歌会の活動状況を明らかにするとともに、彼らの作品を収集する必要があった。

(2)ハワイには沖縄出身のいわゆる移民一世、および帰米二世さらには戦争花嫁と呼ばれる、沖縄方言を理解できる方々が多く居住している。琉歌が盛んに詠まれた背景にはこのことがあるが、一方で琉歌ではなく、俳句や短歌、詩、小説など、日本語による表現活動を行なった沖縄出身者も数多くいる。海外へ移住した人々が日本語や沖縄方言を用いて表現したものは何だったのか。沖縄出身者たちが残した文芸作品の集成はこれまでほとんどなされてこなかったし、研究もまったく手付かずの状態であった。

## 2. 研究の目的

ハワイへ移住した沖縄県人は、ハワイで、どのような思いをして暮らしたのだろうか。

そのことを知る上で、彼等の残した文芸作品に勝るものはないといいだろうが、彼等は、ではどのような作品を残していただろうか。

沖縄から、ハワイへ渡ったものたちが残した文芸作品といえば、「琉歌」をまずあげることができる。そしてハワイで「琉歌」が盛んに詠まれ、なお詠み次がれているのは、他でもなく琉歌会が、健在であるといったことにある。

ハワイには、「ハワイ琉歌会」「本流ハワイ琉歌会」といった二つの琉歌会があるといわれる。ハワイ琉歌会は、これまでに『琉歌集—ハワイ琉歌会創立一周年記念』(1981年9月)、『ハワイ琉歌会同人集—創立満5周年記念誌』(1985年7月)、『微風—ハワイ琉歌会創立10周年記念誌』(1990年)、『アロハ—ハワイ琉歌会創立13周年記念誌』(1993年)、『貫花—ハワイ琉歌会創立20周年記念誌』(1999年)といった琉歌集を刊行している。

「琉歌」は、八八八六、三十音からなる、沖縄方言で表現された沖縄の伝統的な定型歌であるが、それが、沖縄ではなく、ハワイで詠まれ、何冊にもなる琉歌集が刊行されているというのは、ハワイに、沖縄出身のいわゆる移民一世および帰米二世さらには戦争花嫁と呼ばれる、沖縄方言を理解できる方々が数多く居住していることと無関係ではないであろう。

「ハワイ琉歌会」ができたのは一九七九年十二月。同会の作品は、「ハワイと沖縄の架け橋」を謳って創刊された邦字新聞『ハワイパシフィックプレス』に毎号掲載されていく

と同時に、やはり邦字欄を持つ『ハワイ報知』紙に毎月一回掲載されるようになる。そして何冊もの琉歌集を刊行していることから明らかのように、ハワイの琉歌壇は「琉歌」の本場沖縄以上に熱気に満ちているといいだろうが、彼等は、「琉歌」に何を託したのだろうか。

ハワイの琉歌壇は、沖縄の琉歌作者や琉歌大会を主催する関係団体にとって注目の的といいいいが、その研究は、まったく手付けられてない状態にある。それゆえ彼等が「琉歌」に何を託したか、といったことも、これからの研究を待つしかない。

ハワイへ移住した沖縄県人が「琉歌」に何を託したのかは、これまで刊行されてきた「琉歌集」を検討していくことで可能だと言えない訳でもない。しかし、これまで発刊されてきた「琉歌集」は、「ハワイ琉歌会」が結成されて以後の作品を収録したものであった。すなわち一九七九年以後に詠まれた「琉歌」であった。もう一つの琉歌会である本流ハワイ琉歌会の作品は収録されていないし、本流ハワイ琉歌会は独自に会の歌集を編むことをしていない。

ハワイに渡った沖縄人が「琉歌」を詠みはじめたのは、『ハワイパシフィックプレス』が刊行された以後ではない。それまでもハワイで刊行されていた『ハワイ報知』や『日布時事』といった邦字新聞に掲載されていた。しかし、それが何時頃から始まったのかは、今のところ不明である。

「琉歌」の内容を検討していく前になさなければならないことがあるということである。その一つが、いつから「琉歌」が、ハワイで詠まれるようになったかの確定であり、そしてそれがどのような経緯をたどってきたかといった調査である。そのような、基礎的な仕事がなされれば、当然のごとくその内容も明らかにされていくであろう。

「琉歌」研究の新たな展開の一つとして、「移民の詠んだ琉歌」としてハワイで詠まれた琉歌の研究、二つ目には、沖縄で詠まれた「琉歌」とハワイで詠まれた「琉歌」との比較研究を行うといったことがあるが、そのためにはまず資料の収集、整理といった基礎的な仕事がなされる必要がある。

一方で、ハワイに住む沖縄出身者の中には、沖縄方言によらない表現方法を選択した者も多い。「琉歌」の他に、ハワイの邦字新聞に掲載された「短歌」「俳句」「狂歌」さらには「小説」などの収集を行い、「海外沖縄移民たちの表現——ハワイ編」の総合的な研究を推し進めることも今後必要となってくるであろう。今回のハワイ「琉歌」の研究は沖縄文学の新たな研究の幕開きとなっていくこと確実である。

### 3. 研究の方法

- (1) ハワイ琉歌会の会員に、歌を作り始めたきっかけや、その時期、歌会での活動状況などについての聞き取り調査を行う。また、ハワイに移住した沖縄出身者を対象に、ハワイでの暮らしぶりについて聞き取り調査を行う。
- (2) ハワイ大学マノア本校ハミルトン図書館、ホノルル公文書館において、『ハワイ・パシフィック・プレス』や『ハワイ報知』、『日布時事』といった、ハワイで発行されている邦字新聞に掲載されている琉歌及び琉語川柳を収集する。その際、全体の統括及び資料の調査を代表者の仲程昌徳が、資料の収集・整理を分担者の前城淳子が行った。

### 4. 研究成果

ハワイへ移住した沖縄県人は数多くの琉歌を残している。ハワイには「ハワイ琉歌会」「本流ハワイ琉歌会」の二つの琉歌会がある。ハワイ琉歌会はこれまでに『琉歌集—ハワイ琉歌会創立一周年記念』(1981年)、『ハワイ琉歌会同人集—創立満5周年記念誌』(1985年7月)、『微風—ハワイ琉歌会創立10周年記念誌』(1990年)、『アロハ—ハワイ琉歌会創立13周年記念誌』(1993年)、『貫花—ハワイ琉歌会創立20周年記念誌』(1999年)、『梯梧—ハワイ琉歌会25周年記念誌』(2005年)の6冊の琉歌集を刊行している。だが、同会の活動はそれだけではなく、『ハワイ報知』『日布時事』『ハワイ・パシフィック・プレス』といった邦字新聞にも数多く作品を掲載している。これらの邦字新聞に掲載された琉歌を収集・整理することによって、ハワイに移住した沖縄出身者が、ハワイでどのような思いをして暮らしていたのか、琉歌という沖縄の伝統的な定型歌に託したものは何だったのかを明らかにすることができるだろう。ハワイ大学マノア本校ハミルトン図書館に収蔵されている『ハワイ報知』『ハワイ・パシフィック・プレス』の調査を行うとともに、収集した琉歌のデータベース化を行った。また、ハワイ琉歌会の会員に直接会い、聞き取り調査を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 「ハワイ琉歌会」の作品が最初に『ハワイ報知』に現われるのが、1980年2月15日であること、そして32首の琉歌が掲載されていたことが分かった。『ハワイ・パシフィック・プレス』に「ハワイ琉歌会」の名前が現われるのは1980年4

月である。「琉歌」の掲載はすでに1977年11月30日から始まっていたし、1980年の2、3月に掲載された作品集は「ハワイ琉歌会」の詠草に間違いはないが、その名前は記載されていなかった。

- (2) 『ハワイ報知』は1980年～2006年に8,287首、『ハワイ・パシフィック・プレス』は1977年～2004年までに7,638首の琉歌が掲載されていたことがわかった。また、データベース化によって、歌人ごとの歌の検索や使用されている語句の検索が可能となった。
- (3) 『ハワイ・パシフィック・プレス』には琉歌会で発表された歌以外に、個人で投稿した作品も数多く見られる。個人で発表された琉歌と、ハワイ琉歌会、本流ハワイ琉歌会の二つの琉歌会で発表された琉歌を比較検討することにより、ハワイ琉歌会の果たした役割を知ることができた。
- (4) 『ハワイ報知』紙は1985年10月から1990年2月にかけて、803句の「琉語川柳」作品を掲載していたことが分かった。「琉語川柳」とは川柳が575形式であるのに対し、868形式によるもので、ハワイ琉歌会を主催した比嘉武信氏が始めたものである。1985年10月1日付『ハワイ報知』には「琉語川柳は、起承転結の結句六を以て起句、承句、転句の八を挟み、結句六で締める「六八六」調です。／①それとなく遠回しに、物事の過ちを責め咎める／②馬鹿々々しくて笑いたくなり、軽くて旨味がある／③日常生活で起る色々な社会の出来ごと、人の噂を面白おかしく六八六調で綴る／④自由課題で二首以上、何首でも左記へ送って下さい」との一文が掲載されている。沖縄方言を用いた新たな表現の創出である。「琉語川柳」については仲程昌徳の論文「琉語川柳」(研究成果報告書『ハワイ「琉歌」の基礎的研究』2009年 琉球大学法文学部)に詳しく報告がなされた。
- (5) ハワイ琉歌会会長をはじめ琉歌会会員に会い、琉歌会の活動状況や、琉歌に託した思い、ハワイでの生活のことなどの聞き取り調査を行った。現在比嘉良信会長を中心に、毎月一回琉歌会を会長宅で行っていること、毎月一回会員の近況や詠歌の紹介などを会報として出していること、会に出席するのは毎回5～6名であるが、郵便や電話等で作品を送ってくる会員が10数名いることなどが明らかになった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 11 件)

- ① 仲程昌徳 「沖縄戦をめぐる言説—「白い旗」の少女をめぐる—」『日本東洋文化論集』第十五号 査読無し 2009年 9～39頁
- ② 前城淳子 「琉歌〈旅歌〉の諸相」『日本東洋文化論集』第十五号 査読無し 2009年 41～111頁
- ③ 仲程昌徳 「琉語川柳」『ハワイ「琉歌」の基礎的研究』(基盤研究(C)研究成果報告書) 査読無し 2009年 1～18頁
- ④ 仲程昌徳 「沖縄文学歳時記」『やわらかい南の字と思想』沖縄タイムス社 査読無し 2008年 178～191頁
- ⑤ 仲程昌徳 「文芸関係記事余聞——『植物標本より得られた近代沖縄の新聞』を読む」『史料編集室紀要』第三十三号 査読無し 2008年 1～10頁
- ⑥ 仲程昌徳 「『首里城明渡し』小論」『日本東洋文化論集』第十四号 査読無し 2008年 1～28頁
- ⑦ 仲程昌徳 「『南洋群島』目録補遺」『移民研究』第四号 査読無し 2008年
- ⑧ 仲程昌徳 「ハワイ・沖縄移民たちの短歌」『沖縄文化』第四十一巻 査読有り 2007年 1～42頁
- ⑨ 仲程昌徳 「「駆け落ち」する妻たち—外間加津美「盆丘の夕映え」を読む」『〈外地〉日本語文学論』 査読無し 2007年 186～200頁
- ⑩ 仲程昌徳 「ハワイの琉歌—「ハワイ琉歌史」試論」『琉球大学法文学部紀要日本東洋文化論集』第十三号 査読無し 2007年 101～175頁
- ⑪ 前城淳子 「琉球大学附属図書館蔵『琉歌輯』—翻刻と解説—」『琉球大学法文学部紀要日本東洋文化論集』第十三号 査読無し 2007年 29～99頁

[学会発表] (計 3 件)

- ① 仲程昌徳 「慰めから誇りへ」「人と移動と 21 世紀のグローバル社会——移民、言語、文学」 2008年 11月 琉球大学
- ② 仲程昌徳 「文化の交流・伝播 南洋群島の沖縄人」「第二回世界ウチナーンチュ会議」 2008年 8月 ブラジル・サンパウロ市
- ③ 仲程昌徳 「ハワイ沖縄移民たちの短歌」 「環太平洋における移動と労働——太平

洋における日本人・日系人の体験と文学」  
2007年 立命館大学国際言語文化研究所

[図書] (計 3 件)

- ① 仲程昌徳 ニライ社『アメリカのある風景』 2008年 総 289頁
- ② 仲程昌徳 法政大学沖縄文化研究所『沖縄近代俳句集成 I 琉球新報』2008年 総 445頁
- ③ 仲程昌徳 法政大学沖縄文化研究所『沖縄近代俳句集成 II 沖縄毎日新聞』2008年 総 121頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

仲程 昌徳 (NAKAHODO MASANORI)  
琉球大学・法文学部・教授  
研究者番号：50044863

### (2) 研究分担者

前城 淳子 (MAESHIRO JUNKO)  
琉球大学・法文学部・准教授  
研究者番号：90336355